



『列仙傳』にみる道徳的仙人の萌芽

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大形, 徹 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004330

『列仙傳』にみる道徳的仙人の萌芽

大形 徹

はじめに

仙人の話は『史記』秦始皇本紀、封禪書などにみえる古仙人の羨門高・最後等よりはじまる。その後、張良（? - 前186）の話の中で、赤松子の名がみえ、漢武帝（劉徹、前156-前87）のときに安期生の話などがあらわれる。けれども、その数は、ごくわずかである。またそれらの仙人は名前があらわれるのみで、その事跡に関しては、断片的な記述があらわれるのみである。

本来、これらの仙人は皇帝の不老長生願望から生み出されてきたようなところがある。そのため、断片的な記述の中にも不死や長生に関わる表現が散見する。

後世、仙人は道徳的な存在とされることが多い。また功過格のように生前の善行が死後の世界にも影響を与えるという話が道教の中で普遍的となる。「杜子春¹⁾」のなかでも、杜子春は「立孤孀可以衣食（孤孀を立て以て衣食せしむ可し）」と、孤児や寡婦の生活が成り立つようにさせた話がみえ、その道徳的善行によって道士に認められるのである。

しかし、仙人が善を行うといった話は秦の始皇帝（前259-前210）や漢の武帝の話の中では全くあらわれないのである。

それではそのような道徳的な仙人はどこから始まるのであろう。それは前漢の劉向（前77-前6）が著したとされる『列仙傳²⁾』の中にみることができる。拙稿では『列仙傳』の中で善行と関わる仙人を列挙し、その特徴をさぐる。またなぜ、そのような仙人が『列仙傳』の中にみえるように成ったのかについて若干の考察を試みたい。

1 『太平廣記』卷十六神仙所取、唐、李復言『玄怪續錄』。

2 『列仙伝』は実際には、後漢あたりの成立だとされている。『鑑賞・中国の古典9 抱朴子・列仙伝』（小川環樹・本田濟監修、角川書店）1988年（共著者、尾崎正治、平木康平、『列仙伝』部分を平木康平と共同執筆）の「総説」の「讀について（大形徹執筆部分）」参照。

一、古仙人

いわゆる古仙人とされる仙人は数えるほどしかいない。

『史記』封禪書に、

宋毋忌正伯僑充尚羨門高最後皆燕人、爲方僊道、形解銷化、依於鬼神之事。(宋毋忌・正伯僑・充尚・羨門高・最後は皆な燕人なり。方僊道を爲め、形解銷化し、鬼神のことに依る^{*3})。

とみえる。

「宋毋忌」等の五名は方士なのか、仙人なのかということも難しい。この当時、仙人（僊人）」という言葉はまだ熟しておらず、僊者などと呼ばれることもある。

「羨門高」は『史記』始皇本紀に

使燕人盧生求羨門高誓（燕人盧生をして羨門高誓を求めしむ^{*4}）。

とみえる。

ここでは、羨門高ではなく、羨門高誓である。そしてこの箇所『集解』に引く韋昭の注に「古仙人」とされている^{*5}。宋毋忌・正伯僑・充尚・最後についても、注釈にはさまざまな説がひかれる^{*6}が、いずれにしても封禪書のこの箇所に見えるものが初出であろう。

3 『史記』卷二十八、封禪書第六

4 『史記』卷六、秦始皇本紀第六

5 大淵忍爾「初期の僊説について」（『東方宗教』第二号、日本道教学会、一九五二年）は、初期の神仙思想を考察する論考である。この「羨門高」に関しては、宋玉の高唐賦に「有方之士羨門」とあることを根拠として、「求僊人羨門高誓」は僊人なる羨門ではなく、僊人とそれと関係ありとされた祭祀乃至は鬼神の事にかかわる有方之士羨門の屬とを求めしめたもの、と解するのが妥当であろうとする。要するに羨門高は古仙人ではなく、方士であるという解釈であろう。その解釈で大過ないと思われるが、方士が僊人になろうとする者であるとするならば、その境界は微妙で曖昧なものとなる。

6 宋毋忌に関しては『索隱』所引の『老子戒經』に「月中仙人」とあり、同じく『白澤圖』に「火之精曰宋毋忌」とみえる。正伯僑は『索隱』に「古仙人」とされ、王喬や王子喬との関連が説かれる。これについては別に考察する。充尚は『史記會注考證』に『列仙傳』の玄俗との関連が考察されている。「最後」については人名でないという説もある。『史記索隱』は、「最後」は「甚後」であるという。この場合、「羨門高は（他の仙人とくらべて）甚だ後ちの人」という意味となるのだろう。中井積徳の『史記雕題』（吉川弘文館、一九九一年）も同様の意見。一方、『索隱』所引の顔師古および劉伯莊は人名ととる。『史記會注考證』は、王念孫の「最

顧頡剛は、

最早的仙人史料，現在也得不到什麼。只从《封禪書》里知道燕国人宋毋忌、正伯侨、羨子高等都是修道道的；他们会不要这身体，把魂灵从身体中解脱出去，得到了一切的自由。（もっとも早い仙人の史料は、現在も何もみつけれない。ただ、封禪書の中かで、燕の人、宋毋忌・正伯侨・羨門子高らが、みな仙道をおさめていたことがわかる、かれらは身体が不要だとして、靈魂を身体から解脱させ、一切の自由を得た⁸⁷。

と理解する。

仙術修行の者たちという理解であろう。彼等は「方僊道を爲め、形解銷化し」とされている。顧頡剛は、「形解銷化」を、「把魂灵从身体中解脱出去（靈魂を身体から解脱させ）」ることと理解している。後漢の服虔は、「尸解なり⁸⁸」という。

古仙人と呼ばれた者たちの後にも仙人があらわれる。赤松子や安期生などである。これらの仙人は『列仙伝』にも登場するが、本来、『史記』にその名がみえる。

張良は漢の高祖劉邦（前 256- 前 195）の軍師として著名であった。しかし、劉邦の天下統一後、病身のためと称して隠居し、導引をはじめた。そのときの導引の師を赤松子という。

赤松子は『列仙傳』の巻頭に列せられる仙人だが、そこでは兩師として登場し、導引の話はでてこない⁸⁹。

安期生は、漢の武帝の時に方士の公孫卿が説いた仙人である。公孫卿の知人である申公の知人が安期生だという。その申公はすでに、この世にいないという。安期生もまた『列

は「取」で、それは「高唐譜」の「聚穀」だという説を紹介し、それがもっとも適当だとしている。

7 顧頡剛《秦汉的方士与儒生》上海古籍出版社、第三章 神仙説与方士、2005。

8 『史記集解』所引。この後に魏の張晏の注が引用される。「人老而解去。故骨如變化。今山中有龍骨、世人謂之龍解骨化去（人老いて解け去る。故より骨變化するが如し。今山中に龍骨有り、世人之れを龍、骨を解けて化去すと謂う）」とみえる。この場合、「解」は「脱」の意味だろう。「人が老いてぬけさる」と魂が離脱することと捉えているようだ。尸解については拙稿「尸解仙と古代の葬制のかかわりについて」「中国研究集刊」景号、1993年、大阪大学中国哲学研究室編輯。「道教における神仙思想の位置づけ—尸解仙の事例を手がかりとして—」、国際日本文化研究センター『道教と東アジア文化』、国際シンポジウム13集、2000年を参照。

9 「大阪府立大学紀要」人文・社会科学40巻、1992年。のちに「松喬考—関于赤松子と王子喬の伝説—」「復旦学报（社会科学版）」復旦大学、1996年、洪偉民訳・高金校・責任編輯、張兵。

仙傳』に登場する。しかし、そこでは漢の武帝ではなく、秦の始皇帝の時の話とされている。

公孫卿は武帝に対し、古代の皇帝である黄帝もまた龍に乗って昇仙した、と説いた。黄帝が昇仙したという話の最初である。この公孫卿の話は、ほとんどそのままの形で『列仙傳』の中に取り入れられていく。

『列仙傳』の作者とされる劉向は前漢、成帝（劉騫、前 51- 前 7）の時期の学者である。『列仙傳』には赤松子・黄帝・安期生の伝がある。しかし始皇の頃の、宋毋忌・正伯僑・充尚・羨門高は、そのままでは伝として立てられていない。羨門高は『列仙伝』の佚文^{*10}とされ、正伯僑は王子喬と字形が似る^{*11}ために何らかの関係があるかもしれない。

ここで考察した古仙人や秦始皇、漢武帝のかかわりで登場した仙人の話の中では長命や富貴のことが語られるものの道徳的な話は全くあらわれない。

二、『列仙傳』にみえる道徳的仙人

『列仙傳』には七十の仙人の伝記が記されている。その中で、道徳的仙人といえるものとして8名の仙人を取り上げた。いずれも薬物や治療と関連し、鍼と関わるものもある。一般に宗教と病の治療は結びつけられることが多い。教祖とされる人物が宗教的な奇跡を示す場合もある。これはその個人のもつ特殊な能力が強調されてのことである。しかし、『列仙傳』の場合は、おもに薬物の効能が強調され、そのうえにそれを使用する仙人の事跡が語られるのである。以下、簡単に表にまとめた。

10 清、王照圃『列仙傳校正』（郝氏遺書，[8] [東路廳署]，光緒8 [1882])は、本来、七十二の伝記がしるされていたはずだと述べ、『太平御覽』などから、『列仙傳』とある項目を抜き出して補足している。そして上巻に羨門高、下巻に劉安を補っている。

11 前掲「松喬考」で考察。

仙人名	本文	賛 ^{*12} (讃)	備考
3馬師皇	馬師皇者，黃帝時馬醫也。知馬形生死之診，治之輒愈。後有龍下，向之垂耳張口，皇曰：「此龍有病，知我能治。」乃其下口中，以甘草湯飲之而愈。後數數有龍出其波，告而求治之。一旦，龍負皇而去。	師皇典馬，腹無殘軀。精感群龍，術兼殊類。靈虬報德，彌鱗銜轡。振躍天漢，絜有遺蔚。	馬師皇は馬医であるが、その治療法は、鍼灸と甘草湯という湯薬の処方であった。それは人に対するものと同じである。治療したのは龍である。もちろん、無料で治療し、その返礼として馬師皇は龍により、天界に連れて行かれ、仙人となったのであろう。動物にまで慈愛の心で接したことになるかもしれない。
8方回	方回者，堯時隱人也。堯聘以為閭士，煉食雲母，亦與民人有病者。隱於五柞山中。夏啟末為宦士，為人所劫，閉之室中，從求道。回化而得去，更以方回掩封其戶。時人言，得回一丸泥塗門，戶終不可開。	方回願生，隱身五柞。咀嚼雲英，棲心隙漠。劫閉幽室。重關自廓。印改掩封，終焉不落。	「煉食雲母，亦與民人有病者」と病気の民に与えたとある。与えたということは、金銭を受け取っていないということであろう。
11山圖	山圖者，隴西人也。少好乘馬，馬踏之折脚。山中道人教令服地黃、當歸、羌活（獨活）、苦參散。服之一歲，而不嗜食，病癒身輕。追道人問之，自言五嶽使，「之名山採藥，能隨吾，使汝不死。」山圖追隨之六十餘年。一旦歸來，行母服於家間。期年復去，莫知所之。	山圖抱患，因毀致金。受氣使身，藥輕命延。寫哀墳柏，天愛猶纏。數周高舉，永絕俗緣。	山圖は骨折したが、山中の道人に薬をもらい服用すると治った。道人の名はわからないが、五嶽（の神）の使だという。「地黄・当帰・羌活・独活・苦参散」は『金匱要略方論』の「当帰貝母苦参丸」と「当帰」と「苦参」が一致する。服用の結果、「病癒身軽」と記される。骨折は病ではないが、ここでは「病」と記される。「五嶽の使」というのは五嶽の神の使ということになる。『抱朴子』には「五嶽眞形図」がある。

*12 『列仙傳』には、各話の後に四言八句の讃が付けられている。またそれとは別に篇末に長文の総讃が付けられている。『隋書』経籍志には次のように記される。

- 『列仙傳讚三卷』劉向撰 極統孫綽讚。
- 『列仙傳讚二卷』劉向撰 晋郭元祖讚。
- 『列仙讚序一卷』郭元祖撰。

これによれば、東晋の孫綽（311-368）の讚と、晋の郭元祖の讚の二種類あったことがわかる。現行本の『列仙伝』は巻上、巻下の二巻に分かれる。そのため、外見上は『列仙伝讚二卷 劉向撰 晋郭元祖讚』のようにみえる。（讚については、『鑑賞・中国の古典9 抱朴子・列仙伝』（小川環樹・本田清監修、角川書店）1988年（共著者、尾崎正治、平木康平、『列仙伝』部分を平木康平と共同執筆）の「総説」の「讚について（大形徹執筆部分）」を参照した。

40 崔文子	<p>崔文子者，太山人也。文子世好黃老事，居潛山下，後作黃散赤丸，成石父祠，賣藥都市，自言三百歲。後有疫氣，民死者萬計，長吏之文所請救。文擁朱幡，係黃散以徇人門。飲散者即愈，<u>所活者萬計</u>。後去，在蜀賣黃散。故世寶崔文子赤丸黃散，實近於神焉。</p>	<p>崔子得道，術兼秘奧。氣癘降喪，<u>仁心</u>攸悼。朱幡電麾，神藥捷到。一時獲全，永世作效。</p>	<p>※下記で考察する。</p>
48 鹿皮公	<p>鹿皮公者，淄川人也。少為府小吏木工，舉手能成器械。岑山上有神泉，人不能至也。小吏白府君，請木工斤斧三十人，作轉輪懸閣，意思橫生。數十日，梯道四間成。上其巔，作祠舍，留止其旁，絕其二間以自固。食芝草，飲神泉，且七十年。<u>淄水來，三下呼宗族家室，得六十餘人，令上山半。水盡漂，一郡沒者萬計。小吏乃辭遣宗家，令下山。</u>著鹿皮衣，遂去，復上閣。後百餘年，下賣藥於市。</p>	<p>皮公興思，<u>妙巧</u>纏綿。飛閣懸趣，上揖神泉。肅肅清廟，二間愔愔。可以閒處，可以永年。</p>	<p>洪水があったときに、宗族を山に呼び寄せて、その命を救った。</p>
63 負局先生	<p>負局先生者，不知何許人也，語似燕，代間人。常負磨鏡局徇吳市中，磨鏡一錢。因磨之，輒問主人，得無有疾苦者，輒出紫丸藥以與之，<u>得者莫不癒。如此數十年。</u>後大疫病，家至戶到與藥，<u>活者萬計，不取一錢，吳人乃知其真人也。</u>後住吳山絕崖頭，懸藥下與人。將欲去時，語下人曰：「吾還蓬萊山，為汝曹下神水。崖頭一旦有水，白色，流從石間來，下服之。」多愈疾。立祠十餘處。</p>	<p>負局神端，披褐含秀。術兼和鵲，心托宇宙。引彼萊泉，灌此絕岫。欲返蓬山，以齊天壽。</p>	<p>※下記で考察する。</p>

64 朱璜	<p>朱璜者，廣陵人也。少病毒瘕，就睢山上道士阮丘。丘憐之，言：「卿除腹中三尸，有真人之業可度教也。」璜曰：「病瘕，當為君作客三十年，不敢自還。」丘與璜七物藥，日服九丸。百日，病下如肝脾者數斗。養之數十日，肥健，心意日更開朗。與老君《黃庭經》，令日讀三過，通之，能思其意。丘遂與璜俱入浮陽山玉女祠。且八十年，復見故處，白髮盡黑鬢，更長三尺餘。過家食止，數年復去。如此至武帝末，故在焉。</p>	<p>朱璜寢瘕，福祚相迎。真人投藥，三屍俱靈。心虛神瑩，騰贊幽冥。毛積髮黑，超然長生。</p>	<p>七物薬を用いて腹中の三尸等を除いた。老君や玉女祠など宗教に関わる語がみえる。</p>
70 玄俗	<p>玄俗者，自言河間人也。餌巴豆，賣藥都市，七丸一錢，治百病。河間王病瘕，買藥服之，下蛇十餘頭。問藥意，俗云：「王瘕，乃六世餘殃下墮，即非王所招也。王常放乳鹿，憐母也，仁心感天，故當遭俗耳。」王家老舍人自言：「父世見俗，俗形無影。」王乃呼俗日中看，實無影。王欲以女配之，俗夜亡去。後人見於常山下。</p>	<p>質虛影滅，時惟玄俗。佈德神丸，乃寄鹿贖。道發河間，親寵方渥。騰龍不制，超然絕足。</p>	<p>売薬、七丸一錢、治百病などの語がみえる。河間王を「仁心」と評す。</p>

表に掲げた仙人については、簡単に備考欄でコメントした。医療と関連する話が多いが、人々を救う話へとつながっていく。これらの中で、もっとも道徳的な行いをしていると思われるのは、崔文子と負局先生である。以下、その事跡について簡単に紹介し、そのコメントをしたい。

崔文子（本文は上記の表を参照）

「黄老^{*13}」は黄帝・老子とされるが、老荘思想や神仙思想と関わりの深い言葉である。ここでは石父の祠を作ったとされている。また「賣藥都市」と薬を売ることが記されている

13 拙稿「漢初の黄老思想」、待兼山論叢 13 号、1980 年を参照。

る。ただし、疫病の時は、「文擁朱幡，係黄散以徇人門。飲散者即愈，所活者萬計。（文は朱幡を擁し、黄散を係け以て人門に徇う。散を飲む者即ち愈え、活くる所の者は萬もて計う）」とある。これはむしろ採算を度外視して、朱幡にかけた黄散という薬を人々に無償で飲ませたようにみえる。崔文子は『列仙傳』の賛で、「仁心攸悼（仁心の悼む攸）」と「仁」という言葉で褒められている。「仁」は儒教の孔子が推奨した徳目である。道教の書物である『列仙傳』において「仁」だと賞賛されるのは異例のことである。

負局先生（本文は上記の表を参照）

負局先生というのは、局を背負う人という意味である。局は、ここでは鏡磨きの道具の入った箱のことであろう。鏡は製造時にまず磨いて光らせる。そのうち表面が曇ってくるので、しばらくするとまた磨く必要があった。そこで鏡磨きが職業としてなりたつ。「明鏡之始下型、矇然未見形容、及其粉以玄錫、摩以白旃、鬢眉微毫可得而察（鏡が製造され鑄型から外したばかりの時は、ぼんやりとして姿形をうつせない。玄錫の粉をつけ、白旃（白い毛織物）で摩ることによって、鬢、眉、まで、くっきりとみえる）」（『淮南子』卷十九修務訓）と記されている。錫の粉と毛織物だけで行商ができるのである。かつて日本にあった包丁研ぎや穴のあいた鍋の修理をする鑄掛などと似ている。特殊な技術が必要ではあるが荷物がそれほど多くなくてもすむ。

魏文帝（曹丕（187-226））撰『海内土品』には、「徐孺子嘗事江夏黃公、公死往會葬、家貧無以自致、資磨鏡具、自隨質磨、取資、然後得前、既至祭而退（徐孺子嘗て江夏黃公に事う、公死し往きて會葬せんとするに、家貧しくして以て自ら致る無し、磨鏡の具を資え、自ら質磨に隨い、資を取り、然る後に得前むを得、既に祭に至りて退く^{*14}）」という話がみえる。

主人の葬式に参列する費用がないため、鏡磨きで路銀を稼いだ話である。ただし、負局先生の場合は、「磨鏡一錢」と安価であるため、決して割りのいい商売だとはいえないであろう。

負局先生の目的は鏡磨きを利用して、人々が病気で苦しんでいないかを知ることであった。鏡を磨くのは時間のかかる仕事だと思われるが、その間、雑談をしながら、持主に病気のことを尋ねるのには好都合であった。民に疾苦があれば紫丸薬という薬を与え、なおらないものはなかったという。紫丸薬は紫色の丸薬というのみで、その詳細は不明である。このようなことを数十年続けたあと、疫病が発生した。そのときに家々をたずねあて

薬をあたえ、命の助かったものが数万人にもなりましたが、一銭もお金をうけとらなかった。そのため、呉の人々はかれが真人だと思ったという。祠が各地に立てられたのも当然である。



負局仙人

王世貞輯次『有象列仙全傳』中國民間信仰資料彙編 /
王秋桂、李豐楙主編、臺灣學生書局、1989年より。

三、『列仙傳』の特徴

『列仙傳』全体としては長生をめざす話が多い。その特徴は薬物による昇仙が全体の話の中に大きな割合をもつことである。『列仙傳』の説話は七十あるが、そのうち四十三に薬物の名があらわれる。薬物の種類はちょうど五十で、総数はのべ六十以上にのぼる^{*15}。薬効としては不老・長生・若返りがある。そのため、それらの薬の服用によって昇仙できるといふ話が多い。

そのことから『列仙傳』の仙薬の話は、採薬の方士の薬物販売と関連があるのでは、とかつて推測した。なぜなら、そこには「採薬父（巻上、僮佺）」・「千丸に十斤の桂（巻上、桂父）」といった薬の採集や製造に関わる語および「売薬（巻上、崔文子、巻下、玄俗）」・「七丸一銭（巻下、玄俗）」と販売や価格に関する表現がみえるからである^{*16}。

15 拙稿『『列仙伝』にみえる仙薬について』、『人文学論集』第6集、1988年、大阪府立大学人文学会。

16 前掲『『列仙伝』にみえる仙薬について』64頁。

崔文子は薬売りではありながら、人々の命を救うためには採算を度外視して薬を配り、負局先生もまた多くの人々を救ったが、一銭もとらなかったという。

おわりに

仙人の話のもっとも古いものは『史記』にみえる。それは秦の始皇帝の仙人探索から始まった。それは始皇帝の不死への希求にもとづくものであった。当初、仙人の数は、ごくわずかであり、その事跡も明らかではない。漢の武帝も同様に仙人を探索したが、仙人の数は、やはりそれほどふえなかった。また仙人の話は、方士によって語られることが多かったため信憑性にも欠けていた。それらに共通するのは仙人が長生であるということで、それは皇帝の願望を反映したもののようみえる。それらの仙人の事跡のなかには、仙人が道徳的な行いをしたということは、全くあらわれない。

『列仙傳』は基本的には薬物による長生や昇仙を中心とした書物だが、そのなかに道徳的仙人の萌芽とみなしうる話がいくつかある。それがここで取り上げた負局先生や崔文子の話であろう。それらの話は、病を治し、命を救うという医薬本来の話にもとづき、仙人が無償で多くの人々を疫病から助けたという話になっている。

仙人の話の方が道教よりも前にある。そのため道教が生まれた時、そのなかに仙人の話を取り込んでいくことになる。道教の始まりは東漢、張道陵（34-156）の五斗米道である。張道陵は天人に教えられた方法で「能治病（能く病を治む）^{*17}」し、その結果、百姓が奉事するようになったという。このような話も、さきにあげた『列仙傳』の話とつながるところがあるだろう。

※本稿は、2014年11月26日、江西省鷹潭龍虎山で開かれた第三屆「國際道教論壇」（中國道教協會、中華宗教文化交流協會主辦、香港道教聯合會、澳門道教協會、台灣中華道教總會協辦）で発表したものの日本語版である。中国語版は、楊冰訳「列仙伝的道德仙人的萌芽」として『國際道教論壇論文集上』、中國道教協會、2014年、331～335頁に掲載されている。

17 『太平廣記』卷八、神仙八、張道陵。